

十月二十一日

「体調」

ここしばらく、医者のおすすめで体重を減量したり食事制限したりで体に気をつかっている。変なことだが、気をつかい始めて体重も減り医者は仲々良いと喜んでくれるのだが、私の方の体調は良くない方へ向かうばかりである。昨日は昼食を藤塚光政と共にしたが、藤塚も少し計り細くなり、前よりは上品な風体になっていたので「どうした」と尋ねたら、案の定、私と同じに医者のおすすめで減量したんだけど、以来どうも体調が良くないところぼしていた。「気力がね、特に闘争心がいまひとつなんだ」私は思わず藤塚のホッソリした顔を自分の顔を見るように眺めた。私の今の気分とウリ二つなのである。身体の各種数値やレントゲンその他の測定可能な世界は医者も喜ぶ位に良いのだけれど、けれども、気力がいけない。ダイエットしたらどうも気力が充分に湧き上がらない。年令その他の現実を直視してみれば、この状態は身体の転形期なのかと思はざるを得ないが、それにしても今の私の具合は極めて面白くない。良くないと記せば、変な憶測が飛び交ってしまっただろうから面白くないと表現するしか無いのだが、何と言えれば良いか、要するに気持と身体がビターツと貼りついた、コインの裏表状態になってしまっている。研究室の丹羽太一や、車椅子の千村君、そして藤沢の高橋さんの事を考えるに、私の今の身心状態を、より突きつめた状態なのであろうと憶測する。気

持ち、意志があっても体が言う事をきかない。体が言う事をきかないから、気持が応ずる事をしない。その連続なのだろう。彼等と同様に、私も又、そう簡単にはこの状態を抜け出す事はできないだろう。そう考えておいた方が良い。この状態はある種の必然であると受け入れた方が良いようだ。ただ、受け入れると言う事は、悪あがきはせぬ、無駄な抵抗はしないとと言う事で、あきらめてしまう事ではない。人間は愚かな者だから、丹羽君や千村君、そして高橋さんの状態と比べれば、自分の体調の悪さ等は極楽だと、詰まらぬなぐさめをしかねないところがある。

私が今、理解できるようになったのは元気という単純な表現の体調と、不調、不具合としか言い様のない体調とは、ほとんど何の变りが無い世界だと言う事である。紙一重の境界線しかなく、それは連続している。あっさり同じだ、と割切つてよいだろう。

では、今できる最良の事は何かを考えてみる。最良の事というのは当たっていない。一番深い事。私にもあるかも知れぬ本来やらねばならぬ事に近づく事は何であるか、を良く考えて、少しでも成すことだろう。

つづく